



さいとう かずのぶ 斉藤一修さん

大工、斉藤建築代表、
福祉住環境コーディネーター2級、増改築相談員

FJCの知識を生かした大工仕事で たくさん笑顔に出会える喜びを実感中

「僕は大工で、福祉住環境コーディネーター検定で得た知識やスキルを活用して仕事を広げています。せっかく得た知識を埋もれさせてしまうのはもったいないですね」

そう話す斉藤一修さんは、愛知県豊田市で一人親方の大工として、新築リフォーム、エクステリア等、快適な住まいづくりのためのさまざまな施行工業務に携わっている。

「去年は介護保険の給付対象となる住宅改修工事を60件行いました。今年には100件が目標です」とやる気満々だ。

やりがいある仕事に 出合えて感動

車の街、豊田市で生まれ育った斉藤さんは、少年時代から、橋やトンネル等、スケールの大きなモノづくりに憧

れていた。工業高校の土木科を卒業すると、地元で最大手の建設会社就職。折しも日本経済はバブル景気に湧いていた。斉藤さんは、道路をつくるという花形産業の現場監督としてバリバリ働いた。

「活気あふれる現場で汗をかきながら、無性に仕事をした結果に喜んでくださる方々の笑顔を見たくないのです」

それを求めて工務店に転職。27歳で、現場監督をしながら大工見習いを始めた。工場、倉庫、商業施設等、大きな建物をつくった。しかしオーナーとの関わりはあっても、やはり生活する人の顔は見えてこない。32歳で独立し、仕事を個人の住宅に絞った。

「FJC検定を受験したのは、9年ほど前。個人事業主なので大きな看板がない。お客さんの信頼を得るには

車の街として知られる豊田市で、花形職種である道路工事等の現場監督から、個人の住宅にかかわる大工に転職。福祉住環境コーディネーターとしての視点から、高齢者の快適な住まいづくりを支援する仕事に従事している斉藤さん。工事完成で終わらせず、暮らしに寄り添い、利用者と家族を長く見守り続ける。もったなくさんの笑顔に出会えうべく、ネットワークを広げ、研修会などでも勉強を怠らない。その思いや活躍ぶりを取材した。

FJCみたいな資格のようなものが必要だと思ったのです。福祉住環境コーディネーターなら介護保険での住宅改修費の支給申請書類を作成することもできます」

トイレの段差を解消し、手すりを付ける工事をした。高齢な利用者は「もう嫁の手を借りずに一人でトイレに行けます」と涙を流した。今度は斉藤さんが感動した。「こんなにやりがいのある仕事ってないな」、福祉住環境コーディネーターとしての仕事に、どんどんはまっていった。

高齢者の暮らしに 寄り添い続ける

「完成したら終わりではない。お客さんは年月を経て容態も変わるので、長いつきあいになります。住宅改修をしたお宅の様子が気になり、立ち寄る

と、『いい所に来た』と電球の取り換えを頼まれることもありますよ。便利屋さんみたいに使われるけれど、まったくかまわないんです」

高齢者は、寂しがりやで、悪徳業者に狙われやすい。だから「地域でいつも見守っていますよ」というメッセージを発信し続けることが大切なのだ。庭のせん定ができなくなった、水道漏れがある、等々の相談を持ちかけられたら、それぞれの専門業者につなげる。するといつのまにか地域での見守りネットワークが強化されていく。斉藤さんは、他業種の知人から住宅改修の仕事を紹介されることも増えてきた。

「仕事を受けたら、僕ひとりでは最後までやり、外注には出しません。そうすればお客さんが希望される予算が低めでも何とか工夫できます。それに依頼した人と違う人が工事に来たら、高齢者の方は不安になります」

高齢者目線をまず大事にする。たとえば、耳が遠い方、麻痺がある方など、工事の最初から最後まで同じような配慮が必要だ。もし顧客がデイサービス



高齢者目線を大事にして、仕事はひとりで一から最後までやる。

に行っている間のトイレ改修であれば、帰宅時間までに必ず終えておく。もし工事中で片づいていないと危険だし、トイレにも行けなくなるからだ。

信頼関係の構築こそビジネスチャンス

あいち福祉住環境研究会主催の研修会にはよく出席するし、講師として登壇することもある。現場に密着した斉藤さんのリアルな話は参加者に大受けだ。

「失敗事例を出し合って学び合うことも大事。即実践に結びつきます」

たとえば、工事にキャンセルが出た場合、コミュニケーション不足をどう改善すればよかったか、セミナーの参加者によって熱い議論が交わされる。

研修会は人脈を広げ、ビジネスチャンスを得る場でもある。斉藤さんは、参加したケアマネジャーともよく名刺交換をするが、『勉強熱心な人で、信用できそうだ』ととらえられ、困難なケースの相談が寄せられたりする。介護保険の利用者の仕事をした後、担当ケアマネジャー宅の工事依頼が来たこともある。

また次のような例もあった。段差解消や扉を付ける工事をしたお宅の利用者が亡くなった。しばらくして、そのご家族から高額な建築の注文が来たのである。利用者は『無理な注文を聞いて

てくれた。大工として信用できる。何か必要になったときは、斉藤さんに頼むように』と言が残っていたのだ。

「確かに介護保険を利用した住宅改修は、利幅は多くないかもしれないけど、結果的に大きなプラスアルファが付いてくることも。やりがいはいにありません」

さまざまな人生を紡いできた高齢者の一人ひとりと向き合い、暮らしをより快適にする手伝いをする。こんなにもしろい仕事はないと斉藤さんは言う。

「誠実に仕事を積み重ねていると、ときどき、バランスよく大きな仕事も入ってくるものです。」

今後、各地域のFJCともっと交流を深めて、情報交換や若手の活躍の場をつくる手伝いもしたいと考えている。顧客は百人百様で、福祉住環境の整備に「これで十分」というゴールはない。斉藤さんは、実績を積みながらスキルアップしながら、たくさんの笑顔を見るのを楽しみにしている。

取材・文／境 朗子



↑「あいち福祉住環境研究会」のセミナーで、講師として手すり設置の実演をする斉藤さん。

事例紹介

『柔軟で斬新なアイデアを駆使して快適な住環境づくりに取り組む』

バブル経済期、トヨタ自動車のおひざ元でも人口集中が見られ、急峻な山間部に至るまで、たくさんの方譲住宅が建てられた。住民の高齢化による住宅問題が顕在化しつつあるなか、豊田市では介護保険における住宅改修費支給だけでなく、それを補完する助成事業を実施している。利用者にとって大いに役立つ事業だが、斉藤さんらは、それらの適正な活用と質向上のために、施工業者の情報をもホームページ等である程度オープンにする等のアイデアを行政に提案中だ。

さまざまな環境にある利用者と家族のニーズをくみ上げながら斉藤さんが実施してきた住宅改修の事例を紹介する。

山間部に立つ住宅に暮らす要介護5の高齢者と家族のケースでは、大胆な改修を施した。2階で暮らす高齢者を家族が車で外出させるのはきわめて困難だった。そこで2階のベランダから、その真向かいに位置する道路沿いの駐車場に、耐久性抜群のウリンという木材を使って橋を渡し、スムーズな移動を可能にした。(写真①)

「烟仕事をするお宅等では、屋外にくみ取り式のトイレがあることも珍しくありません」

そんな住宅に暮らす家族から、住宅の和室を寝室にしてトイレを設置する依頼があった。



↑③玄関前に設置した遮断機式の手すり。



↑①2階のベランダから向かいの道路まで橋渡しを設置。

←②和室をフローリングの寝室にし、床の間をトイレに改修。利用者の思いを考慮して床柱は残した。

ランニングをした。

「床の間をトイレにリフォームすると、サイズのにもちよいといいですね。押し入れをトイレにする場合もあります。収納をどうするかを考える必要が出てくるでしょう」(斉藤さん)。(写真②)

また玄関前に一部を遮断機式にした手すりを設置した例もある。高齢者が通るときなどふだんは降ろしておき、家族が浄化槽設置場所に行く等、必要な時だけ手すりを上げる。介護施設等でもこのタイプの手すりは使い勝手が良い場合がある。(写真③)